

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から

(Dis)Continuation of Jingxue from Qing Period to Modern Age: From the Perspective of Muluxue

2. 研究代表者氏名

竹元 規人

Takemoto Norihito

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

4. 研究目的

中国は独自の伝統的学術を有し、それは長い歴史のなかで大きな変遷をたどって来た。本研究は、その学術の清代から近代にかけての断絶と連続を、次の視角から明らかにすることを目的とする。まず、章学誠の「六経皆史」説などを根拠として、「経学から史学へ」という命題が中国近世・近代思想史において言われるが、学術の淵源と展開を跡付け、学術を分類しながらその統一的把握を図る章の目録学の立場から出発して、経学が史学を含む様々な学術へと転換する契機を清代学術史の中に探る。次に、「六経皆史」への解釈等、清代学術に関する通説的理解がいかんにして確立してきたのか、清末以来の学術史の言説を見直すことで跡付ける。最後に、第一の視角によって得られた清代学術史の見通しの上に、第二の視角から跡付けられた近代学術史を位置づけることで、二つの視角を総合し、それによって清代から近代にかけての、経学の断絶と連続とを、鳥瞰的に明らかにする。

China has its own traditional scholarship, which has undergone a great deal of change throughout its long history. The purpose of this study is to clarify the (dis)continuity of Chinese scholarship from the Qing period to the modern era using the following perspectives. First, based on Zhang Xuecheng's contribution to Muluxue, we look for those opportunities in the history of scholarship throughout the Qing period that have allowed for the transformation of Jingxue into various academic disciplines, including history. Zhang's Muluxue traced the origins and development of scholarship, classified it, and tried to present it in a unified manner. The theory of "Liu Jing Jie Shi (the Six Classics are all history)" does

not necessarily only apply to the transformation “from Jingxue to history”. Second, we trace how the commonly held understanding of Qing scholarship, such as the interpretation of the theory of “Liu Jing Jie Shi”, was established by reviewing the discourse on the history of scholarship that has occurred since the late Qing period. Finally, we combine these two points of view to provide a bird’s-eye view of the (dis)continuity of Jingxue from the Qing period through to the modern era.

5. 本年度の研究実施状況

本研究班は、『文史通義』の会読・ならびに訳注作成を通じ、清朝学術のありかたを解明することを目的としており、本年度は同書巻四の「匡謬篇」から読解を進め、1月20日現在、同巻の「砭俗篇」までの訳注稿を作成し終えた。年度末までには、巻四を読了したうえで巻五を読み始める。

また本年度は、本研究班に先行する研究班「『文史通義』研究」班の成果として、『文史通義』巻三の訳注を完成させ、『東方學報』第95号（2020年12月）に掲載した。

さらに、3月14日に、研究班主催の国際シンポジウムを開催し（Zoomを使用したオンライン会議）、台湾・日本の研究者に講演を依頼する予定である。そのほか、2月初旬には、小型のオンライン研究会を予定しており、中国の若手研究者に研究発表を行ってもらい、班員の知見を広めることとしている。

6. 本年度の研究実施内容

2020-05-19 『文史通義』巻四会読 16 匡謬篇（1）古勝隆一 人文科学研究所
2020-06-02 『文史通義』巻四会読 18 匡謬篇（2）古勝隆一 人文科学研究所
2020-06-16 『文史通義』巻四会読 18 匡謬篇（3）古勝隆一 人文科学研究所
2020-07-07 『文史通義』巻四会読 16 質性篇（1）臧魯寧 京都大学大学院文学研究科
2020-07-21 『文史通義』巻四会読 16 匡謬篇（2）内山直樹 千葉大学
2020-10-06 『文史通義』巻四会読 17 黠陋（1）小島明子 新潟大学
2020-10-20 『文史通義』巻四会読 15 黠陋（2）成田健太郎 京都大学大学院文学研究科
2020-11-17 『文史通義』巻四会読 14 黠陋（3）道坂昭廣 京都大学大学院人間環境学
研究科
2020-12-01 『文史通義』巻四会読 14 俗嫌 永田知之 人文科学研究所
2020-12-15 『文史通義』巻四会読 15 鍼名 竹元規人 福岡教育大学
2021-01-19 『文史通義』巻四会読 13 砭異 福谷彬 人文科学研究所
2021-02-02 『文史通義』巻四会読 砭俗① 発表者 王歆 京都大学大学院文学研究科
2021-02-16 『文史通義』巻四会読 砭俗② 発表者 王孫 京都大学大学院文学研究科
2021-02-07 『文史通義』研究報告会① 「章学诚的文集论与清代学人文集编纂」 発表者
林鋒 北京大学中文系・ポスドク研究員

2021-03-14 『文史通義』研究報告会② 「中国学術史と文献学——章学誠の学術構想を起点として」 発表者 張壽安、嘉瀬達男、永富青地 台灣中央研究院近史所研究員、小樽商科大学 言語センター教授、早稲田大学創造理工学部教授

7. 共同研究会に関連した公表実績

『文史通義』内篇三訳注、『東方學報』第95号（2020年12月）

8. 研究班員

所内

古勝隆一、永田知之、藤井律之、白須裕之、福谷彬

学内

宇佐美文理(文学研究科)、道坂昭廣(人間・環境学研究科)、中原佑真(文学部)、王孫涵之(文学研究科)、臧魯寧(文学研究科)、成田健太郎(文学研究科)、田尻健太(文学研究科)、王歆(文学研究科)

学外

竹元規人(福岡教育大学教育学部)、内山直樹(千葉大学大学院人文社会科学部)、渡邊大(文教大学文学部)、重田みち(早稲田大学演劇博物館)、山口智弘(駒澤大学文学部)、白石將人(中山大学歴史学部)、小島明子(新潟大学人文学部)、古橋紀宏(香川大学教育学部)、新田元規(徳島大学総合科学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		13 (1)	3 (1)	6 (1)	5 (1)	4 (1)	129 (13)	28 (13)	56 (13)	50 (13)	36 (13)
国立大学		4 (1)	0 (1)	1 (1)	1 (1)	0 (1)	34 (10)	0 (10)	10 (10)	10 (10)	0 (10)
公立大学		1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	13 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)
私立大学		3 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	17 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関		1(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他											
計		0 (3)	21 (1)	3 (2)	7 (2)	6 (1)	193 (30)	28 (13)	66 (23)	60 (23)	36 (13)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数	
		うち国際学術誌掲載論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	4	3
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1	0
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	9	1
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	0
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0	0

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
《單周堯教授七秩華誕國際學術研討會論文集》	1	R2. 11	《論語》 鄉黨「立不中門」 皇疏考正	古勝隆一
《大夏與北魏文化史論叢》	1	R2. 8	漢趙劉淵家屬的儒學背景	古勝隆一
『香文化録』第5号	1	R2. 5	香纓考	古勝隆一
『中国研究月報』74号	1	R2. 5	「新文化運動」と「文化主義」	竹元規人
『論叢アジアの文化と思想』(29)	1	R3. 1	『陳亮集・増訂本』抄訳(三)	中嶋諒、 福谷彬共訳

『書学書道史研究』 第 30 号	1	R2. 10	法帖画像アーカイブを研究資源として活用するために」	成田健太郎、 中村覚、 水野遊大、 共著
『書論』第 46 号	1	R2. 10	王羲之と衛夫人の師承関係について	成田健太郎
『書法漢学研究』28 号	1	R3. 1	董其昌に於ける陽明学と禅理解に基づく書画論に就いての考察	陳佑真、 松宮貴之、 共著
東英寿主編『唐宋八 大家の探求』	1	R3. 3	蘇軾の『周易』解釋に於ける爻位及び爻間関係の重視——注疏との比較を中心に	陳佑真
川原秀城主編『漢学 とは何か：漢唐お よび清中後期の学術 世界』	1	R2. 06	鄭玄と王肅	古橋 紀宏
『人文科学研究』第 1 4 7 輯	1	R2. 12	王国維「人間詞」考—青年期作者の経歴から見た詞の背景—	小島明子
『歴史文化社会論講 座紀要』（17）	1	R2. 2	正倉院藏王勃詩序校証 （下）	道坂昭廣
『文史』131 号	1	R2. 5	今本『毛詩草木鳥獸蟲魚 疏』辨偽	王孫涵之
『日本中國學會報』 72 号	1	R2. 10	北宋初期における「注疏 の學」：邢昺『論語正義』の編纂をめぐって	王孫涵之

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

コロナ禍のため、出張費が使用できなかったため、変更が生じた。

12. 次年度の研究実施計画

『文史通義』の訳注稿の作成は、本研究班の大きな目的のひとつでもあり、またそれによって清代学術を理解し研究するための手段でもある。2021 年度も、引き続き、同書の訳注を進めることとする。2020 年度と同様の開催頻度とし、だいたい 15 回程度の研究班開催を予定している。2021 年度は、『文史通義』巻五の前半部分を会読する予定である。

また、2021年度には、すでに2020年度までに読み終えた『文史通義』巻四の訳注稿を整理し、2021年12月発行予定の『東方學報』第96号に投稿する予定である。

さらに、清代学術に関する国際シンポジウムの開催を予定している。

なお、研究班ならびに国際シンポジウムの開催については、感染症の流行状況を考慮し、可能であれば対面の開催とするが、本年同様、そのほとんどをオンライン開催とする可能性もある。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	12	450000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				200000
消耗品等経費				100000
その他				
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021年度には、すでに2020年度までに読み終えた『文史通義』巻四の訳注稿を整理し、2021年12月発行予定の『東方學報』第96号に投稿する予定である。

全体の計画としては、先行する『『文史通義』研究班』の成果とあわせ、期間内に『文史通義』内篇五巻すべてに訳注を施す予定である。

さらに、中国学術史・清代学術および目録学に関する研究書を刊行することを目標としている。